

知立市文化財マップ



知立神社の文化財

知立神社は、古代より名の知られた由緒正しい神社であり、境内に建立された多宝塔、山車文楽とからくりを奉納する祭礼など、その古い歴史や文化財が多く残っており、知立を象徴する存在となっています。

知立神社

社伝によれば景行天皇の頃の創建と伝えられ、仁寿元年(851)の『日本文徳天皇実録』が初見の記事である。延長5年(927)に成立した『延喜式神名帳』にその名が見える式内社で、三河国二宮としても知られた。江戸時代には池鯉鮒大明神とも呼ばれ、まむし除け、雨乞い、安産の神として信仰を集め、東海道を通る多くの旅人が訪れた。



扁額 県指定

神階が正一位であることを示す正安3年(1301)の刻銘のある扁額である。



※知立神社に伝わる文化財は、毎年春の花しょうぶ祭の期間(5月25日から6月20日)に一般公開されます

多宝塔 国指定

嘉祥3年(850)に、神宮寺が創建され、境内に二層の塔を建立、仏像愛染明王を安置したという。現在の塔は永正6年(1509)の再建とされる。明治元年(1868)の神仏分離の令の際には愛染明王の像を撤去し、相輪を取除き修造を加えて、「知立文庫」とすることで、破壊の難を逃れた貴重な建造物である。

木彫蛙(蛙面) 市指定

江戸時代に雨乞い神事に使われた金箔貼りの木彫りの蛙



能面・舞楽面 県指定

「若女」面は顔が少し長く古風で小細工の施していない優秀な作品である。全国に現存する能楽面は二十四種類で、神社にはそのうちの六面が伝わっている。



若女

抜頭

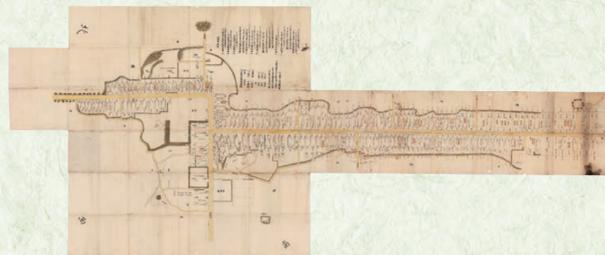
鰐口/蓬萊鏡/獅子頭/木矛 芭蕉句碑/石橋/松平清康寄進状 徳川家康判物(写)/お万の消息写 手焙形土器 市指定



獅子頭

池鯉鮒宿と東海道の文化財

池鯉鮒宿は東海道五十三次の一つで、品川より39番目の宿駅です。知立神社への参拝や馬市、木綿市などで賑わいました。宿には、駅業務を行う問屋場、大名・公家等の泊まる本陣のほか、庶民向けの旅館・茶屋などが軒をつらねていました。



東海道池鯉鮒宿並図

東海道池鯉鮒宿の街道沿いの敷地割りか描かれた絵図。民家の各敷地割りの中には、間口、商売、田畑の高、主人名、伝馬役などが記されている。

問屋場跡

問屋場は宿駅の業務全般を取仕切ることで、主に公用旅行者のための馬と人足を用意し、次の宿まで運搬する人馬の継立と、幕府の公用文書を運ぶ通信業務を担っていた。その問屋場は昭和46年に取り壊され、その跡地を示す碑が立っている。



来迎寺一里塚 県指定

慶長9年(1604)幕府によって江戸日本橋を基点に一里(約4km)ごとに街道の両側に一对の塚を築き、その上に板・松が目印に植えられた。来迎寺一里塚には松が植えられ、北塚は原形を残しているが、南側は一部改造されていたため、昭和36年に北塚のみ県の指定文化財に、その後復元された南塚も平成8年に追加指定された。この様に両塚が完全に残されているのは大変珍しい。

池鯉鮒宿本陣御宿帳 県指定

本陣は参勤交代の大名や公家、幕府の役人などが休泊するための施設。池鯉鮒宿で長く本陣職を務めた永田清兵衛が代々記録した『池鯉鮒宿本陣御宿帳』(県指定文化財)が寛文2年(1662)から安永元年(1772)までの、全8冊残されている。



馬市の跡 市指定

歌川広重が浮世絵「東海道五十三次 池鯉鮒 首夏馬市」で描いているように、当地では馬市が盛大に行われていた。『東海道名所図会』などによれば、馬は毎年4月から5月初め頃まで開かれ、その数は400から500頭にもおよんだ。馬を売買する人はもとよりその他の商人や遊女、芸人、役者、人形遣いまでが遠方から集まってきて賑やかであったという。また、談合松とよばれた松の下で馬を売買する馬喰が集まって儲けを決められたという。

知立古城跡 市指定

知立神社の神官永見氏が城主を兼ねていたとその家譜にある。桶狭間合戦後に織田軍により落城、のち刈谷城主水野忠重が御旗形を建て、将軍の上洛などで休憩所とされたが、元禄期の地震で倒壊したという。

知立松並木 市指定

かつては並木八丁と呼ばれたところで、現在500メートルにわたり松並木道となっている。この付近一帯でかつて馬市が開かれていた。

知立の山車文楽とからくり

知立の山車文楽とからくりは、平成2年(1990)に国の重要無形民俗文化財に指定され、平成28年(2016)には「山・鉦・屋台行事」33件の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録もされました。

知立まつり

知立神社の祭礼である「知立まつり」は、5月2日、3日に行われている。知立まつりは本祭と問祭が交互に開かれ、本祭は、5台の山車が町内を練り歩き、境内で山車文楽とからくり(国の重要無形民俗文化財)が上演奉納され、問祭では、花車が奉納される。また、山車の担ぎ上げも見どころのひとつである。



知立中町祭礼帳 県指定

江戸時代から知立神社祭礼に関する記録として中町の代々の惣代が書き綴ったものである。

内容は、祭礼にかかる費用や人形浄瑠璃芝居の外題・遣い手、天候やもめごと、山車の建造・修理、池鯉鮒宿の時代ごとの世相まで様々記されている。



知立の山車文楽とからくり 県指定



文楽(3人遣いの人形浄瑠璃芝居)は江戸時代から伝わる伝統芸能で、各地で上演しているが、山車の上で上演するのは知立だけである。

現在では、山町・中町・本町・宝町の4台の山車で「三番置」「傾城阿波の鳴門」「壺坂観音霊験記」「神靈矢口の渡し」などを上演している。知立のからくり(糸からくり)は、浄瑠璃にあわせて、からくりだけで物語を上演する大変めずらしいものである。このからくり人形は町の人々が工夫して作ったもので、現在は西町のみ継承されている。



三河八橋の文化財

八橋は、平安の歌人「在原業平」が、「からころも きつつなれにし つましかれば ほるぼるきぬる たびをしぞおもふ」と、句頭に「かきつばた」の5文字をいれて詠んだように伊勢物語の昔から知られるかきつばたの名勝地です。

八橋伝説地 県指定

在原業平とされる「伊勢物語」の主人公かきつばたの歌を詠んだ場所と伝えられる三河八橋の逢妻川周辺が「名勝八橋伝説地」である。

その伝説地には、宝篋印塔(ほうきょういんとう)(業平の骨が収められていると伝えられている業平供養塔)があり別名「いば神様」とも呼ばれ、地元の人からは親しまれている。

方巖和尚(八橋売茶翁) (1760~1828)

名は方巖。臨濟僧。福岡に生まれ、幼くして両親に先立たれ仏門に入り、京都で修行を積んでいる頃、初代売茶翁遊外の生き方に感銘し、煎茶道を学び、茶を売りながら諸国を巡歴していた。

江戸から京都へ旅の途中八橋を訪れ、荒廃していた在原寺を再興し住職となり、後に無量壽寺を復興させた。

杜若池 市指定

八橋は「伊勢物語」によって、かきつばたの群生地イメージとして有名となった。江戸時代の文化文政年間(1804~30)に、無量壽寺を再興した方巖和尚(八橋売茶翁)によりもともとあった池や庭を煎茶式に設えられたという。



竹製 箆 県指定

竹製の笈で、中には煎茶道具一式が納められおり、方巖和尚(八橋売茶翁)が背負って煎茶を売り歩いていた道具。

※4~6月の期間に、八橋史跡保存館にて一般公開されます。



ちんねん 長線

軸が長い四弦の弦楽器である。これとほぼ同じ長線が名古屋の徳川美術館に収蔵されており、江戸上りの琉球使節から寛政年間に送られたとされている。しかし無量壽寺の長線の来歴は不明である。



猿渡川流域の文化財

猿渡川流域には、弥生時代から古墳時代を中心とする遺跡が数多くあり昔から集落が築かれていました。

萬福寺のイブキ 県指定

萬福寺のイブキは樹齢約500年と推定され、樹形もよく主幹のねじれがあらわれている。また萬福寺の本堂、山門、鐘楼は登録文化財である。



赤目権元弘法

遍照院は元々上重原家下の地にあったといわれており、延宝年中(1673~81)の間に現在の地に移ったと伝えられ、跡地は赤目権元弘法として残されている。弘法大師がその地を去る時、別れを惜しむ村人の願いを受け、赤目権の木で3体の自像を刻み、その一体が遍照院に安置され、少し右に傾いているので「見返弘法大師」と呼ばれている。他の二体は西福寺と密蔵院に安置されており、この三寺を三河三弘法と呼ぶ。



荒新切遺跡 市指定

西中町の猿渡川左岸の台地上には、弥生・古墳時代を中心とする遺跡がいくつもあり、そのうちの荒新切遺跡の一部が史跡として保存されている。



郷倉 市指定

江戸時代に凶作、飢饉等の備えのために穀物の貯蔵庫として村ごとに造られた倉である。明治時代に入ると大半が取り壊されたが、市内唯一残された倉は移築され、現在、谷田神明社境内にある。



内藤魯一銅像

内藤魯一は、福島藩の家老の家に生まれ、明治維新後福島から当地に移って立藩した重原藩(旧福島藩)の大参事として士族授産に奔走し、その後、自由民権運動を推し進め指導的役割を果たした人物である。昭和11年(1936)、魯一の屋敷跡(現在は猿渡公民館)に有志によって銅像が建てられた。



遍照院

三河三弘法が一番礼所であり、弘法大師の自像3体のうち一体「見返弘法大師」が本尊として祀られている。毎月、旧暦21日の弘法大師命日には、弘法さん縁日が開かれ、名鉄知立駅から遍照院までの道沿い(当日は歩行者天国になる)約1キロの間に出店が並び、多くの人で賑わう。

